


 こだま

健康教室の現状にみる代替医療(補完医療)への動向

藺田 順 (藺田歯科医院)

私は医療資格者として、あるいはグループの友人として健康教室の講師をつとめさせていただくことがあるのだが、最近、健康教室のあり方について、考えさせられる機会がふえてきた。

市民の健康意識が高まりをみせているのは、実は、医療が信頼できなくて自己防衛に走る姿ではないのか。もし、そうだとしたら、我々医療人のとるべき次なる手は何か。医療に外国資本が参入し、アメリカ型医療に惑う前に、今、市民がどのような健康意識を持っているのか、どういう意識を持った人が患者として目の前に現われるのか、考えておく必要がありはしないだろうか。ここで健康教室を大きく次の二つに分けて考えてみる。

◇医療資格を持った者が行う場合

難しく専門的になりやすい。医者(講師)の押しつけや独りよがりになることもある。講師に対して、聴衆が発言しにくい。

◇医療資格を持たない者が行う場合

同格の人同士の研究会・勉強会の形式をとるため発言や意見交換が活発であるが、正しい理解に結びつかずムードに流されやすい。

いずれにせよ健康教室は、病医院を含む医療健康サービス業における“販売促進事業”の一つではある。しかし、果たして販売促進(拡販)だけが目的でよいのか。特に医師が行う場合単なる患者獲得のためというより、教育・啓蒙の姿勢の方がはるかに大切であろう。

最近美容業界が健康教室に着目し、盛んに行う

ようになっている。内容も専門的で医療関係者が聴くと驚かされる。市中の医者に勝るとも劣らぬ「単語力」である。薬事法など規制はあるもののほとんど意に関せず、美容・エステの旗のもと、その内容たるや怖いもの知らず、他人事ながらヒヤヒヤすることすらある。なぜ医療サイドがこの部分をカバーできないのかと思うこともしばしばである。

最近の栄養補助食品(健康食品)の中には薬物に近い作用を持つものが簡単に入手可能となり、それらに興味を持つ市民も多く、販売主導型の健康教室がその驚くべき「単語力」の源であろう。市民はあくまでも知りたがっているのだが、医療側から頭ごなしに言われることにはヘキエキとする傾向がますます強くなってきており、情報源としてそのようなものに依存しつつある。

今後医療関係者としてはこのような現実をふまえ、対処していくが必要になってくるだろう。ある意味ではそんな彼らに歩みより、場合によっては追いつく努力すら必要となるかもしれない。

さて、「代替医療(alternative medicine)」という言葉をご存じだろうか。

遅ればせながら、やっと日本でも1998年11月に「日本代替医療学会*」が金沢大学医学部産婦人科教室のご尽力によって旗揚げすることになったのは、たいへん喜ばしいことである。同年12月には「日本代替・相補・伝統医療連合会議」が発足した。私達にも学ぶ場が準備されつつあり、今後の医療のニーズを適確に捉えていくことができるようになろうとしている

* 日本代替医療学会 (The Japanese Society for Alternative Medicine and Treatment : 略称J.A.M.)

設立:平成9年2月1日

代替医学・医療の定義:現代西洋医学領域において、科学的未検証および臨床未応用の医学・医療体系の総称。具体的には、漢方診療、薬効食品の医療への応用、アロマテラピー、音楽療法などきわめて多種多様である。